



2012年1月

シャミナード年

ギヨーム・ヨゼフ・シャミナードと共に 永久に取り消し得ない賜であるマリアへの奉仕において



この部屋でシャミナード師は
1850年1月22日亡くなった。

私が会を大事にするのは、ただ、それを神のみ業と考えるからです。私は、会を統治し、首尾よくその目的と使命に導くためには、最も無能な者と思っています。しかし、主が私の光、私の支えです。私は、自分が挑発したのではないかぎり、いかなる反対も迫害も恐れませんが、もし神が誰かを私に送られ、その手にすべての権限をゆだねることができ、自分は、神のみ前で正直にそう考えているとおり、会の中で末席を占める者に見做されるようになれば、私はそれを格別のお恵みと受け取ることでしょう。しかし、神がこのみ業のために私を必要となさっていると信じる間は、ずっと自分のこの地位に留まるでしょう。苦痛も、屈辱も、反対も、そして迫害すらも、すべて私にとっては紛れもない利益となるはずです。

(書簡 3巻 801. 1835年10月10日 ララン師宛)

私は年をとり、これを感じてもいますが、間もなく私たちの主イエス・キリストに、最初の革命の前からそれ以後の私の生涯の間に与えてくださった使命について報告することになるはずですが。私はかなり大きな試練を経てきました。最大のものは、間一髪で死刑台から私を引き離した 1793年のものではありません。1844年の試練は、はるかに大きなものです。神に賛美、マリアに栄光。

(書簡 6巻 1313. 1844年8月17日 カイエ師宛)

シャミナード師は当時その死まで続く9年間にも及ぶ、マリア会総評議員会との対立の葛藤の中にあつた。師はだんだんと会並びに会員に対する影響力を失っていった。



1850年1月24日、ボルドーの聖アンドレ教会において、名誉参事会員ギヨーム・ヨゼフ・シャミナード(89歳)の葬儀が執り行われた。彼は故人である両親の息子であり、自身聖体と終油の秘蹟に強められ、ラランド街4番で二日前に病死した。

この証書に署名する私司教代理がこれを証明する。

G. カズナーブ. 司教代理

(ボルドー司教座教会聖アンドレ教会の記録)

極みまで

神の僕の遺骸が運ばれる時、ララン師はその葬送の辞を次のような荘厳な宣言をもって終えた。

「かれの行動と言葉の証しとして、ここ、私たちと同じように証しをされる天のみ前で宣言いたします。シャミナード師がその時間を過し、仕事に専念する時、神のため、また魂を神に導くために行わなかったことが一日でも、いや一時間でもなかったということは驚くべきことではありません。信心のために役に立たない書き物、手紙、提案、教え、模範、すすめを師から引き出すことは誰も出来ません。神の人と呼ぶ以外に彼を描写することは出来ません。」（手紙Ⅳ、P345）

「神的英知と善きすすめの御母よ、あなたは私の導き、私の光です。私はこの仕事を始めるにあたり、あなたがより良く知られ、愛され、仕えられること以外の望みを持っていません。尊敬すべきシャミナード神父の生涯とその使徒活動の歴史を書くことは、彼の働きを通してあなたを知らせることではないでしょうか。なぜならシャミナード神父はあなたのため、またあなたによってのみ行動したこと、マリア会はあなたの事業であったこと、魂の救いに対する熱誠の靈感の下に彼自身行ったことはすべてあなたの事業とみなされなければならないことを繰り返し述べてやまなかったからです。」（ヨゼフ・シムレル 個人的日記とノート 1895年5月1日 1901年出版のシャミナード伝著述にあたって）

マリアへの奉仕にいつまでも

シャミナード師が活躍していた時代を特徴づけたような社会的、文化的、宗教的大変動の時期には、キリスト信者には堅固な確信に満ちた個人的選択が求められる。このような状況のなかで、また自らの経験に基づき、シャミナード神父はマリアの使命の重要性とマリアへの永久的な献身の大切なことをますます自覚していった。修道者にとって、マリアへの奉仕のために各会員と修道会の間に関わされる契約を決定的なものにすることが、堅忍の誓願の意図するところである。



ローマ、聖ペトロ大聖堂
2000年9月3日
ギョーム・ヨゼフ・シャミナード師の列福式
教皇ヨハネ 23世の隣

19. 堅忍の誓願によって、会員は自らをマリアの僕の身分に永久に、取り消し得ない方法で置くとするものである。・・・可能なかぎりマリアの知識を広め、その愛、信心を永続させる敬虔な意図をもって・・・

20. さらに、従事する事業においてマリア会への協力を決して拒まない意向をもって堅忍の誓願を宣立する。（1839年のマリア会会憲）

このマリアへの奉仕に永久に留まるという精神はすでに信徒の枝において存在していたもので、1801年以来、全信徒会員によって用いられていた奉獻の祈りの抜粋に示されている。

「・・・私は〔神の母の〕崇敬〔に〕私を与え、献身いたします。
その無限罪のおん宿りを特別の方法をもって讃え、常に讃え続けるでしょう。私はその母としての優しいご胎に身を投げ出します。そして私の生涯の日々をマリアの子の輝かしい愛すべき身分が私に吹き込む尊敬と、従順と、信頼と愛をもって充たします。（文書と言説 1巻36）

シャミナード神父は彼自身その生涯を通してマリアへの奉仕に献身することによってこの堅忍を精神と文字に従って — 誓願を宣立することなく — 生きていた。1839年8月24日の手紙の中で彼の使徒的遺言を私たちに残している。

「教会はいつの時代にも尊いマリアの戦いと輝かしい勝利のしるしを帯びてきました。主がマリアと蛇の間に敵意を吹き込まれて以来（創世記 3・5）マリアは絶えず世と地獄に打ち勝ってまいりました。教会が語るによればすべての異端は至聖なるおとめの前に頭をたれ、徐々に無の沈黙に帰せられたのです。

ところで、現代はびこっている強力な異端は宗教無関心であって、これは魂を麻痺させ、利己主義の弊害に落とし入れ、情欲の荒廃に引き込もうとしています。・・・こうして信仰の神々しい明松はキリスト教国の内部でも光を失い消えつつあります。徳は退きその実践はますますまれになり、悪徳は猛然と荒れ狂っています。

どうやら私たちは、一般的な脱落と、ほとんど全世界的な、いわば事実上の背教という、予言された時機に立っているようです。



「現代についてのかくも悲しくありのままの描写は、しかし、私たちを落胆させるものではありません。マリアのおん力は減じておりません。私たちはマリアがこの異端をも他のすべての異端同様打破してくださるものと固く信じます。なぜなら、マリアはかつてのように現代でも卓越した婦人、蛇の頭を砕く方として約束されたあの婦人だからです。

また、マリアをこの偉大な名「婦人」でしかお呼びになることがなかったイエス・キリストはマリアが教会の希望、喜び、命、そして地獄にとっての恐怖であることを私たちにお教えになります。従って、今日でも大勝利は彼女に留保されています。私たちの間で、沈みかけている信仰を救う榮譽はマリアのみ手にあります。

「ところで、私たちは天のお考えを理解いたしました・・・マリアに熱心に私たちのつたない奉仕を捧げ、そのご命令に従って働き、そのお側で働かなければなりません。私たちはマリアの兵士、僕として、その御旗下に召集された者で、また、特別な誓願、すなわち堅忍の誓願によって、生涯の終わりまで、地獄に対するその崇高な戦いであって、全力を尽くしてマリアの手助けとなるよう約束しました。そして、あの有名なある修道会がイエス・キリストのみ名と旗印を奉じてきたように、私たちはマリアの名と旗印を奉じてきましたし、また、その崇敬を広め、マリアを通して人々のうちに神の国を広げるために、マリアがお呼びになる所にはどんなところでも馳せ参じる用意があります。

「以上がまさに、私たち二つの会の特有な性格と家風です。すなわち、私たちは、風俗の改善、信仰の維持と増大、そして、そのことから、隣人の聖化という偉大な事業にあって、特別に至聖なるおとめの助手であり、道具なのです。・・・私たちは生涯の終わりの日まで、忠実にマリアに仕え、マリアが私たちに命じられることを正確に遂行することを誓います。

そして私たちはマリアのおかげによって得た生活と力をその奉仕のために費やすことができることを幸いといたします。そして、これこそ私たちにとって最も完全なものであると信じるが故に、

他の会則を選び、それを奉じる権利を、私たちの誓願によって正式に禁じているほどです。堅忍の誓願によって、私たちは、着手した事業に生涯の終わりまで最善を尽くして協力することを当然の義務として自分に課したわけです。

「私が本修道会の固有の性格とみなしていることは・・・私たちが修道者の身分を奉じるのはマリアのみ名によって、またその栄光のためであるという点にあります。すなわち、私たちは私たちの身体も財産もすべてをささげてマリアに献身し、マリアを知らせ、愛させ、マリアに仕えさせようと努める者です。私たちはただ至聖なる御母をとおしてのみ人々をイエスに連れ戻せるものと確信しています。」

(書簡 5巻 1163)



ラ マドンナ デイ パラフレニエリ、
細部 (1605) イタリア. カラバッジョ

彼女(彼)はお前の頭を砕くだろう